

小説

## 鬼 雨

ゆとり 漫

### 1 篠突く雨

スーパーマーケットに隣接する駐輪場から自転車を引き出そうとしていた東彦の左腕にぼつりと冷たいものが落ちてきた。「ん？」と思つて、彼は空を見上げた。北西の空の底から雲がゆつくりと湧き出し、広がっている。鉛色の雲は水分をたっぷりと蓄えているような気配で、腕時計を見ると三時二十分であつた。続いてまた雨がポツリと落ちて来た。今度は腕時計の風防の上であつた。雨滴は四方に散り、文字盤をぼやかした。

「予定より早まったな」

東彦は独り言をいう。

今朝の天気予報では午後四時頃から雨が降りだすとあつ

を持つ東彦には薄茶色のサングラスは欠かせなかつた。

しかし、ぼつりと風防に落ちた雨のしずくは後が続かなかつた。やれやれと思ひながら東彦は駐輪料金百円を精算機に投入し解錠すると、出口に向かつた。

「降らないでくれ」

と念じながらまた空を見上げた。北の空にもくもくと湧いていた黒雲は一変し、ならしたように北の空から西の空一面に広がっていた。全天鉛色になるのは時間の問題だな、東彦はそう思った。不安が彼の心に広がつた。

東彦が天候を気遣うようになったのは自転車を常用するようになってからであつた。

東彦は小学校の教員を退職した後、友人のビルの五階で不登校の子たちの学習支援を始めた。それまで通勤はもっぱら自家用車であつた。しかし、「支援」に関わるようになってからは月の駐車場代、ガソリン代、事務所の維持費などの出費がバカにならないのである。そのため経費削減と運動を兼ねて車の使用をやめたのである。自転車では片道三十分強である。時間としてはそれほどものではない。しかし、東彦はこれまでの二十年間の帰宅途中に雨に降られたのは十数回もある。しかもそのうち数回はこの雨によるひどいカゼに罹患してしまっているのだ。「二の舞はごめんだ」と思ったのは当然のことであつた。それ以来、毎

た。そのことが念頭にあつたので、東彦は大事をとつて早めに仕事場を出たのであつた。だが、どうやら雨雲の発達の方が早そうであつた。東彦の仕事場から自宅までは自転車で三十五分ほどだ。急げば三十分で着ける。この暑さである、少しの雨ならむしろ大歓迎だ。東彦は安易に考えた。というのもこのところ三十五度前後の気温が一週間も続いていた。降り注ぐ日光には耐えがたいものがあり、日によつては家から出るのが怖いとさえ思うことがあつた。実際に降り注ぐ日光は白い光の針と化し、肌に突き刺さる感じさえしたのである。それにしても、東彦は思った。

「日光に怖気づく」などという経験は初めてだ。やはり氣象異状は進行しているのだと。そのせいか、緑内障の眼疾朝自宅を出る前に天気予報を確認することは習いとなつてしまつたのだ。従つて、この日も確認をして家を出た。予報では午後四時以降から弱い雨が降りだすとあつた。最近の天気予報は正確である。東彦は「三時半ごろ出れば雨に降られないだろう」と判断した。「例え降つて来たとしても雨に降られるのは五分もないだろう」と、樂觀的に考えたのである。

「それにしても黒い雲はいやに厚いな。だが本降りにはまだまだ間があるだろう」

東彦はそう考えながら自転車を押した。しかし、一抹の不安が頭を掠めたのも事実であつた。そんな懸念からか、再び東彦は空を見上げた。

彼は不吉な予感に駆られた。雲の厚さと言ひ、流れ方と言ひ尋常ではなかつた。だが東彦はそんな考えを振り切り「たかが三十分である。濡れていこうか秋の雨だ」と言いながら表道路に出た。この道路にはスーパーや果物、文具店などの小売店、また飲食店が並び、買い物や食事をする人たちでにぎわっている。しかし、この日は心なしか行きかう人の数は少なく、なおかつ人々の歩く足も速くに見えた。

東彦は人々の間を慎重に進んだ。自転車と人、また自転車同士の事故が多くなっているからである。現に一週間ほ

ど前、東彦は後ろから来た自転車にぶつけられて右手の甲に傷を負ってしまった。大したけがでもなかったので相手の詫びを受け入れ、別れた。

しかし、この時の傷は高温多湿の気候のせいもあったのか、治りが遅く、ぐずぐずと長引いた。一番に困ったのは入浴である。「お風呂の水は雑菌だらけ」という医師の脅しめいたことが耳の底にあった東彦はビニルの手袋で傷を保護したり、入念に消毒や軟膏を塗布したりと面倒なことをやらざるを得なかった。そんな経験が東彦の自転車走行を慎重にさせたのである。この駐輪場から七、八百メートルほどの先に小田急線の踏切がある。時間帯によつては三分余待つこともある。この三分は長い。カップラーメンの三分待ちと似たようなものである。その上、あつという間に車や人の列ができてしまう。イライラしても笑つてもこの時間が縮まることはない。しかし、どうしてもイライラしてしまう。待つている人たちの顔色を窺うとみなそのように見える。楽しそうな恋人同士らしきカップルまで首をねじり電車の確認しているほどである。

「開かずの踏切にぶつからないで」

東彦はそう願いながら向かう。近づくにつれ「キンコンキンコン」という踏切の警報音が高くなる。

「やつぱりな」

ているような趣である。人によるとこれは日本人の団体行動の特性で多くの場面で整然と行動できる天与の能力を備えられているからだという。確かにバスや電車の乗降、またラーメン店などの順番待ちなどは誰言うことなく整然と列を作る。何らの混乱を惹き起こすことがない。渋谷のスクランブル交差点での人の行き交いはもはや芸術的とすら見える。今やここは外国人観光客の定番コースにさえなっている。しかし、これが飼いならされ従順化した結果であるとする、喜んでばかりはいられない。「わが国民は実に御しやすい」などと為政者にほくそ笑まれたならたまらぬ。

東彦はそんなことを思い浮かべながら踏切を渡った。渡り終えると五十メートルほどの先には交差点がある。あいにくここも赤信号で少し待たされた。しかし、踏切と違い交差点の信号は決まった時間が組み込まれ、それに順じて信号の色は変わっていく。先が読めるのである。慌てることも焦ることもない。そのはずであったが、やはり東彦は心が急くのであった。そして天を仰ぎ「なんとか家に着くまで小降りのままであつてほしい」と祈るのであった。

東彦の自転車は電動自転車、正確には電動アシスト自転車である。上り坂や走り始めのいわゆるダッシュには極めて強力な加速力が機能する。東彦は混雑する交差点の人の

東彦はそんながっかりした声を漏らしながらも「一本の電車が通過するだけだ」と思い込む。しかし、こういう時に限って一本の電車通過では終わらない。各駅停車、回送電車、そして快速、さらにロマンスカーと続き、まるでババを引いたように、また意地悪をされたように各種電車のお披露目を「拝見」する仕儀と相成るのである。頼みもしないのに。

ぼつり、ぼつりと、今度ははつきりとした雨粒が両腕、頬を打つ。「まじかよ」と叫んでしまった。雨雲が堪え切れないとばかりに降りだしてきたのである。空は一面灰色のシートで覆われ、もはや晴れる気配など微塵もなかった。「尋常な雨ではないな」

そうつぶやき、そして「今日は仏滅か」と、東彦の口から愚痴が洩れた。

踏切の警笛音が止まり、遮断機がようやく上がった。待っていた人たちがそれとばかりに動き出した。一見すると人も自転車もごちゃ混ぜの状態で、規律が取れていないように見える。それでも人と人、人と自転車、自転車と自転車とぶつかるといふことはない。東彦が自転車で仕事場に通りようになってからはや二十年は経つが、一度とて揉め事に遭遇したことがない。これは踏切の先の交差点でも同様である。まるで衝突防止ICチップが頭脳に組み込まれた。

群れを慎重にかき分けながら進んだ。そして人の群れが切れるや尻を上げ、ペダルを思い切つて踏む。すると自転車はまるで小型ロケットを装着しているかのようにスピードを上げ、あつという間に後方の人の群れは小さくなってしまった。

と、それに比例するように雨の粒が大きく、勢いが増してきた。もはや雨の勢いは増すだけだ、と東彦は諦めざるを得なかった。文字通り天に任せるほかはなかった。そしてついに雨は音を立て、東彦の胸、太ももを痛めつけるように降り注いできたのである。「ポツリと来た時に仕事場へ戻り、雨が通り過ぎるのを待つべきであつたか」と、ちらりと後悔の念が東彦の脳裏をかすめた。しかし、東彦はそんな恨み言を払い除けると意を決し、さらに自転車の速度を増した。雨はさらに強くなった。「線状降水帯」と言う言葉が脳裏に浮かんできた。そんな予報はなかったはずだ。しかし、東彦の今までの強い気持ち崩れていくように不安でもあった。その時であつた。微かながらではあつたが雷の音が東彦の耳に届いてきたのだ。相模原は名前の通り原っぱが広がる。西に丹沢山系が連なっておりそれが上昇気流を発生しやすくなるらしい。そのため雷の発生数も増えるらしいのだ。今東彦が通っている街は通称「病院通り」と言われている。小田急相模原駅から真っ直ぐ北

上した突き当りに旧国立相模原病院があり、その名の一部を借用し命名されたのである。現在、この通りは一方通行になっており、さまざまの店が軒を並べている。普段は人通りが多いのであるがさすがにこの雨である、通る人は少なかつた。この病院通りを抜けて一キロほど進むと視野が明け、相模原そのものの原っぱが出現する。視野の止まったところに丹沢山系の山々、そして市民の馴染みの、そして敬愛する大山の姿がある。これらの山々の雄姿が展望できるのは通称「水道道」と言われる旧畑地灌漑水路の跡地である。今は歩行者と自転車の専用道路になっているが、勿論歩行者が優先である。もし、雷が続くようであればこの水道道は雷の格好の「餌場」となるに違いない。東彦は既に傘寿を一年近く過ぎていますがまだ死にたくはない。まして雷に打たれるのは相当痛いだろう。しかも雷が走った身体は黒焦げになると聞いている。こんなみつともない死に方はご免こうむりたい。昔から「地震雷火事親父」と雷の怖さは第二位にあげている。恐ろしさは昔も今も変わらないのである。先人が雷を怖さ第二位に挙げたことは実に納得がいくのであった。

雨はますますひどくなってきた。空を黒くするような大雨であった。東彦はもうすでに全身ずぶぬれであった。

「雨も成長するのか」、それならこの雨は「篠突く雨」とる腹部が針で刺されているような痛みなのである。さらに腹部と太ももを覆う衣服がちぢまり、体を締め付けているのである。雨粒の痛み、雨に濡れた衣服による締め付けというものを東彦は初めて経験したのであった。しかも雨は激しく吹き付け、地面を叩くのだった。それがまたしびきとなつて地面を吹き付けている。さらに一メートル先は霧がかかった状態なのだ。東彦は「こんなことつてあるのか」と、思わず唸ってしまった。もしかしてこれが新聞やテレビなどで報道されている「線上降水帯」なのかと思つた。

西の空がぴかりと光った。数秒後にガラガラと音が走つた。東彦は思わず自転車のハンドルを持つ手をきつく握りしめてしまった。雨だけならば心配はなかつた。この季節である。例えばびしょ濡れになったとしても寒さに震えることはなかつた。自宅に帰りがちにしてシャワーを浴び、着替えれば後は笑い話で済む話である。しかし、雷はそうはいかない。もし落雷に遭おうものならば「いい年をして豪雨の中を自転車で走り周り、あまつさえ雷に打たれるなんて全く愚かしい」と笑ひ者にされかねない。

東彦が「線上降水帯か」と、恐れ危惧したのは必ずしも外的ではなかつた。実はこの時刻ごろ、ここからそれほど離れていない工事現場で二名の作業員が死亡していたの

いべきか。ふとそんな考えが東彦の頭をよぎつた。しかし、防水帽子のお陰で頭部だけは濡れていない。そのせいか頭脳はいつもに増して明瞭なのである。明瞭と言っても普段の脳のレベルが水準以下であるのでその明瞭さ具合は、他人にも容易に推し量れるというものである。それでもしばらくぶりにクリスタルな脳に返つたのはうれしいことであつた。しかし、そんな透明感は一瞬時であつた。顔に当たる雨の量はただ事でないほどである。しかも額の雨はひとつの流れとなつて目に入るのである。さらに視界をよくするはずのメガネは雨粒だらけになり、逆に視力を悪くしている。東彦がメガネの下から指を入れて目に入る水を拭おうとするがとも間に合わない。勢い頭を下げた雨を避けようとする。帽子のつばも加わり前方を見る視線はかなり下がる。これがいけなかつた。視線が下がると上方の視界も狭くなるのである。その結果、前方から来る自転車や通行人が目前に来るまで気づかないのである。突然出現するということになるのである。あわや衝突ということが二度ほどあつた。豪雨の中、交通事故を起こしたらとんでもない事態になる。東彦はできるだけ視線を上げ、前方を注視するように努めた。

身体を打つ雨が痛い。「これはなんだ」と東彦は思わず叫んでしまった。自転車を漕ぐ太もも、雨が直接にぶつかつた。下水道の耐震工事のため作業していた三十代と四十代の男性が急な豪雨で流され行方不明になつたのである。二名は三日後、相模川で遺体となつて発見されている。作業当時、管内の水位の急な上昇という異常状態を知らせる赤色回転灯が点灯していなかつた可能性があつたらしい。この日、午後四時過ぎまでの一時間に33ミリの雨が降り、相模原市などに大雨注意報が発表されていたのであつた。

## 2 小池と化した地面に激突

東彦の自宅まで道はまだ半ばである。自宅まであと二十分ほどはたつぷりとかかる。それに風の勢いも増してきているようなのだ。「雨が降るとどうして風も吹いてくるのか」、脈絡もなくふとそんな考えが浮かんだ。東彦はそんなのんびりしている場合ではない、思わず自分自身を叱りつけた。そんな声にはつとなつた東彦は「高い電柱の傍はなるだけ避けて行こう」と、自身に言い聞かせた。幸い、その後の雷鳴は遠くなつた。東彦はほつとした。

この水道道は、一キロほど先の通称村富線と言われる県道五〇七号線によって寸断される。その近くには市立の体育館、プール、清掃工場、広大な公園、さらに女子美術大学がある。市民にとっては貴重なエリアであり、東彦も子どもたちを連れて、また一人でいくども利用した。特に温

水プールの使用頻度は多い。東彦は雨に煙るそれら光景を横目に見ながら北里大学、そしてその附属病院の方向に向かって進んだ。彼が走る歩道はいつもと違い、すれ違う自転車姿は全く見られなかった。この雨だ、さすがに皆敬遠しているのだろう。この大学を過ぎると東彦の自宅は直ぐである。東彦は安堵の胸を撫でおろした。そんなほっとした気持ちに気を緩めたのか、あるいは強雨が目の視力を弱めたのか。それともしぶく雨が段差を見えなくしていたのか。いずれにしても大きな段差があるのを見過ごしてしまったのである。

いきなりガツーンという衝撃がハンドルを持つ手、そしてサドルに乗る尻に伝わってきた。両の手を力いっぱい絞った。しかし、衝撃を抑える効果は少しもなかった。それは当然であった。段差に乗り上げてからのブレーキであったからである。しかし、急ブレーキは別な効果というよりとんでもない事態をもたらしてしまった。段差と急ブレーキが合わさった結果、自転車の停止圧力は通常の二倍、三倍になった。そのため自転車は前のめりになり、その勢いを受けた東彦は前方に飛ばされてしまったのである。バチヤツという水の跳ねる音がした。更に肩とアスファルトの地面がぶつかる鈍い音がした。痛みが稲妻のように身体の中核を走った。東彦は思わず「うっ」と唸ってしまった。

手を離れたことも幸いしたのだ。というのも最後まで手を離さないでいれば東彦の身体と自転車は絡まり、一体となって地面に打ち付けられたに違いない。そうであれば最低で打撲、最悪裂傷か骨折を免れなかったろう。六十年も前、たしなんだ武道の痕跡が目覚め、身体を最小限に防御したのである。人生、何が幸いするか分からない、東彦はそのことばをしみじみと噛み締めた。

立ち上がった東彦は最初に左手で右肩の具合を探った。ひりひりする。地面に打ち付けた時に皮を擦りむいたのかもしれない。ついで肩をゆっくりとなでるようにさすった。やはり痛みが走る。しかし、その痛みは肩の表層だけであった。さらに腕をゆっくりと回した。痛みがないのである。東彦の顔に喜色が浮かんだ。骨には異常がなかったのである。「奇跡だ」と東彦は思った。さらに膝を屈伸したり、首を曲げたり腰を前後左右に曲げたりしたが異常は感じられなかった。

東彦は見ることもなく地面を見た。そこは自動車などの出入り口で、歩道より一段低くなっていた。なんとそこは水溜まり、と言うより小さな池のような状態になっていたのである。水は東彦のくるぶしを超えていた。水深二十センチ近くはあったのである。その小池に東彦は突っ込んでいたのだ。転んでいる時に聞いた「バチヤツ」という音

「肩の骨が折れた」と、とつさに思ったのだ。東彦は自転車が前方に傾斜した際に、ハンドルを握っていた手を緩めたらしい。その結果、東彦の身体は前方に投げ出されてしまったのである。それ以降の記憶は東彦の頭脳には残っていないかった。

投げ出された身体は反射的に頭と身体を丸め、結果、全身が円となって地面に投げ出されたようなのだ。「ような」と言う訳は「地面に投げ出された」という表現が正確ではないからだ。倒れこんだ時、ザバーとかバチヤツという水を切るような、あるいは水を打つような音がしたからである。

後ろから圧力のかかった丸い身体はそのまま回転をした。そこに東彦の意思は作用していなかった。あつたとするならば中学生、高校生の時の武道の片々が目覚めて働いたとしか考えようがないのである。よく「一度身に付いた技は生涯離れない」という。泳ぎや自転車がしかりである。うまい具合に前転した身体は、今度は体を開き、横受け身をして身を守ったのである。但し、最初に地面に打ち付けた右肩の痛みはかなりひどかった。

しかし、この身体を丸め、横受け身をしたことは身体がダメージを最小限にとどめたことでもある。さらに、東彦が後ろからの圧力に逆らわず、早めに自転車のハンドルかたのかもしれない。

東彦は「よつこらしよ」と気合を入れながら立ち上がった。瞬間、足の膝の横骨、右手の肘、そして右胸骨に痛みが走った。「やはりただでは済まなかった」と、東彦は思った。念のため東彦は再度ゆっくりと膝や肘、そして横胸をさすった。しかし、思ったほどの痛みではない。「運が強い」、そう思った東彦は、さらにこれらの関節や骨をねじったり、曲げたりした。多少の痛みは走った。しかし、それは素人ながらも骨折ではないことが理解できた。うれしさが体の中を走った。立ち上がった東彦の上着、ズボンから水がこぼれ落ちた。しかし、東彦には衣服が汚れ水にまみれたことなど何ほどにも思えなかった。ただただうれしく、ありがたかった。そして、「よいしよ」と大声を上げると自転車を起こし、サドルをパンパンと叩いた。叩きながら「自転車くん、ありがとう。お陰で命拾いをしたよ」と、語り聞かせた。

興奮から覚めた東彦は改めて周りを見渡した。車道を走る車はなべて高い水しぶきを上げている。下手をすると歩道に立つ東彦の所までそのしぶきが飛んで来そうなのだ。しかも側溝を雨水が音を立てて流れている。ポツリと水滴

が乾いた皮膚を打ったのはわずか三十分ほど前なのだ。ただ事でない雨量に東彦は改めて恐れを感じた。「これ以上事故を起こしてはならない。慎重の上にも慎重を重ねて行かねば」。そう自分に言い聞かせた。

起こした自転車も異常はなかった。東彦はタイヤの破損はないかと入念に点検をした。以前、帰宅途中パンクをしてしまい、閉口した経験があったからである。異常がないことを確認するとゆつくりと自転車を進めた。いつもなら往来する車の騒音もなく、我が物顔で歩道を走る若者などの姿もない。ただただ激しい雨音や自動車の水を切る音が耳に届くだけであった。

### 3 鬼雨

気を取り直した東彦は、再び自転車のペダルを踏んだ。しかし、ペダルを踏む足に力が入らない。豪雨は東彦の身体だけでなく心も痛め、弱めていたのである。だが、ペダルを踏まなければ自転車は前に進まない。自転車が進まなければ東彦の帰宅もおぼつかない。東彦は力をふり絞ってペダルを漕いだ。漕ぐばかりでなく大声で「バカヤロウ」と叫んだ。対象があった訳ではない。やみくもに彼は叫んだのである。二回、三回と。すると不思議なことに再び力が湧いて来たのだ。彼は無意識のうちに自らを鼓舞する方

必死に漕いだ。この篠突く雨が次第に怖くなってきた。尋常の沙汰とはとても思えなかった。その上、人の影が全く見えない。まるで地球最後の日にひとりポツンと残されたような心情に陥ってしまった。そのことも恐怖感を強くした要因だったのだろう。

「この雨はまるで鬼の仕業かと思えるような凄さだ」

ひよいと東彦の頭の中にそんな言葉が浮かんで来た。そして「鬼か」と言い、さらに「鬼の雨か」と、口に出した。「そうだ、この土砂降りには鬼雨おにあめである。鬼雨だ」

東彦はまるで勝どきを上げるように叫んだ。しかも「鬼雨」という言葉は東彦の心にストンと何の抵抗もなく落ち込んだ。それとともにほんの少し前に彼を襲った恐怖心はどこかへ消えてしまったのである。彼は快哉を叫びたくなるほどに心が高揚していった。

東彦はこの「鬼雨」の言葉がよほど気に入ったのか、後日調べたほどである。「鬼雨」という熟語は確かにあった。しかし、その読み方は「おにあめ」ではなく「ぎう」であった。

「鬼の仕業ともいえるような急で激しい雨」という。また「死者の涙のように悲しく降る雨。また、大雨」（「新漢語林」とある。この激しい雨を形容するには「鬼雨」ほど適切な言葉は見当たらない、東彦は真実そう思った。

を見出していたのだった。尻を上げ、視線を地面に向け、全身の力を足に集中したのだ。すると、思いっきりペダルを踏む足先にムクムクと力が伝わっていったのである。冷たい東彦の頬に笑みが浮かんだ。

しばらくして東彦はひよいと顔を上げた。右前方に雨にかすむ白い大きな建物が目に入った。北里大学病院であった。普段なら東彦の自宅まで十分ほどの距離にある。東彦の心にパツと灯あかりが点いた。

「もうすぐだ」

東彦の身体に再び力がみなぎっていくのだった。

東彦は北里病院の西側に沿って真っ直ぐに続く道（直道）はなだらかな上り坂になっている。歩いて通った時には感じなかったが、自転車を漕いで走るとその微妙な高低差が認識できた。

ペダルを踏む足が急に重くなった。目を下に落とすと直道を雨水が川のように流れていた。東彦は水道管が壊れて水が噴出でもしているのかと思った。しかし、実態はやはり雨水であった。雨水溝に落ち葉などが多量に溜まり排水を難しくしているのだ。大量に溜まった水は道路の傾斜に従って流れている。この豪雨、そして川のような流れの中を歩く人の姿はさすがになかった。東彦はペダルを

その時である。かすんではっきり識別がつかないのであるが、何やら物体が徐々に近づいてくる。車であった。姿がはっきりした見えた時は、ものすごいしぶきを上げているのが分かった。そのしぶきをまともにかぶったら水圧で「吹き飛ばされる」のではないか、という恐怖が背中を走らせた。東彦は自転車を止め、道路の端ぎりぎりまで寄せた。

そして、道路の端の一段高い側溝の上に足を置いた。五メートルほどの手前で車が減速した。ゆつくりとした速さになったのである。一瞬にして上がるしぶきが萎えたように消えた。東彦の心の中に安堵と言いかげぬ喜びが湧き上がり、心が温かくなった。運転手が東彦の心中をおもんばかったのは明らかであった。東彦は通過しようとする車に手を振り「ありがとう、ごさいます」と、声を上げた。雨で叩かれているフロント越しに分かったのは「若そうな男性」ということだけである。東彦のお礼の言葉は雨音で聞こえなかっただろう。しかし、彼の振った手は認識したに違いない。彼もまた手を上げ、そしてその手を振ったのである。手が互いの心を通わせたに違いない。長いこと雨にみまわられて冷たさを覚えてきた東彦の身体の奥に、あたたかなぬくもりがじわりと湧き上がるのを覚えた。その車の後姿を見送り、東彦は再び自転車のペダルを漕いだ。林の道は右側が雑木林、そして左側は浄水場の林となっていた。天気

が晴れていたなら汗が引つ込み、一息入れて涼む場所である。しかし、今は篠突く雨である。林の下草の葉を打ち立てている。雨水は林を墨染めにして奥行きを深め、何やらおどろおどろしさを醸し出している。東彦は思わずブルツとなった。冷えだけでない。何か得体のしれないものが藪の中に潜んでいるような気がしたのであった。

「急ごう」

そう自分に言い聞かせると、自転車のペダルを踏んだ。ところが再び今まで感じたことのないペダルの重さである。道路を走る水の流れの深さは七、八センチほどになっていく。ほんの少し低くなっているこの場所に雨水が流れ込んできているのだ。まるで池と化していた。東彦は「チエ」と舌打ちをし、思い切りペダルを漕いだ。スイツと自転車は抵抗なく進んだ。

「なんだ、森の妖怪でも邪魔しているのか」

東彦は、ペツと唾を吐きながらペダルを踏んだ。吐いたつもりは唾は、しかし、少しも出なかった。全身水に浸されていくのに口の中はカラカラであったのだ。彼はそのことを今初めて知ったのであった。口を開けて天を仰いだ。大粒の雨がむやみに口を打っただけであった。自転車を進めていくと五メートルほど先に何か黒い棒のようなものが立っているが見えた。しかし、それは動いているのである。

「かも車や人通り多い林ではあり得ない、嘘だろう」と一言の元に否定するに違いない。しかし、事実なのである。東彦は蛇とは断ち切れない因縁があるようなのだ。

最初に出会った一匹はシマヘビのようであった。五月のころであった。絡み合った体が悶えていた。どうやら首の辺りを轢かれたらしい。少し赤みがかっている。そこまで見て東彦は通過した。しかし、五メートルほど行っただけから自転車のブレーキを掛けて戻った。どうしても何蛇かを確かめたかったのだ。

東彦は蛇の傍らに立つとじっと見詰めた。赤味がかったいると思っただけだが、それは暗いピンク色をしていた。東彦の記憶の箱にはピンク色の在来種の蛇はない。もしかしたら新種か変異種かとドキドキとなった。しかし、常識で考えてもそんなことは絶対にありえない。もがく蛇を見ながら東彦は思索した。首の傷は深く致命傷であることは明白であった。しかし、このままではまた轢かれるのは必定であった。東彦は憐れみを覚え、何とかしてやらねばと思っただけである。ママシなどは首を落とされても噛みついてくることがあるという。そんなシーンが脳裏に浮かぶ。しかし、彼は意を決すると、蛇の尾をつかみそろそろと持ち上げた。頭部の動きには神経を遣いながらであったのは当然であった。もがく蛇の出血はやはり少ない。総じて蛇は

「蛇だ」

東彦は一瞬で悟った。蛇は浄水場の林から抜け出て来て林の道を横断していたのである。色は黒っぽい。川と化した道路上を胴体をくねらせながら滑るように進んでいる。もたげた首は毅然としている。犯しがたい尊厳のようなものさえ備えている。そう東彦には見えた。彼は自転車を止めるとじっとその姿を見つめた。

「ヤマカガシかシマヘビか。それともアオダイショウか」

東彦は自問した。細く長いことを考えるとヤマカガシは除外できる。色を基準に考えるならばアオダイショウである。道の両側は樹木がうつそうとし、しかも豪雨の中である。蛇などの生き物であればみな黒っぽく見えるだろう。しかし、目の前の蛇はこの環境の影響を除外したとしても黒すぎないように見えるのである。ならば「カラスヘビか？」という言葉がぼんと頭に浮かんで来た。何の思索もなくまるで卵の殻がするりと向けたように浮かんで来たのである。東彦の心臓がドキンとなった

東彦は今年に入ってからこの道で既に三匹の蛇を目撃していた。眼前の蛇を加えると四匹である。家人に話せば「嘘でしょう」と笑い飛ばされるのは必定であった。友人三人に話しても恐らく三人が三人「こんなに人家近く、し

出血が少ないような気がする。暗いピンクと思ったが、正確には薄いピンク色で暗色がかっていた。模様はなく細かいうろこがびつしりと敷き詰められたように体を覆っている。しかも全身が滑らかな皮膚なのだ。腹部は白っぽかった。やはり初めて見る種類の蛇であった。東彦はよほど持ち帰ろうかなと思った。しかし、今日に限ってビニルの袋は持参してはいなかった。出血は少ないとは言えそのまま自転車の籠に入れていくわけにはいかない。しかもこの日は九時半からある保護者との面談が予定されていたのだ。「縁がなかった」と思うしかなかった。東彦は蛇の頭部に意を払いながら腕を大きくゆっくり振ると、ひよいと蛇を草むらへと投げ込んだ。投げ込んだ後もやはり後悔した。持ち帰ってよく調べるべきと思っただけだ。「新発見」のこどばがよぎったからである。

この「ピンク色」の記憶はずっと離れなかった。この道を通るたびに思い出していた。ピンク蛇は成体だった。そうである限り個体であるはずはない。必ず同種の複数の蛇たちがいるに違いない。そうすればいつかは遭遇する機会があると思っていたのである。しかしあの日から六カ月が経過している。その間、同種のもと思われる蛇には遭遇していない。薄い黄土色のシマヘビは何かの拍子に色が落ち、ピンク色になったのかもしれない。あるいは脱皮をした

ばかりでたまたまピンク色が突出していたのかもしれない。しかし、東彦には確信が持てない。

日本本土に生息する蛇は八種である。東彦の見聞している蛇はそのうちのニホンマムシ、ヤマカガシ、アオダイショウ、シマヘビの四種である。ジムグリ、ヒバカリ、タカチホ、シロマダラの四種は事典でしか見たことがない。いずれにしてもピンク色のヘビは存在しない。

「ピンク色と見えたのは錯覚だったのだろうか」

東彦は次第に自信を失っていった。

二匹目はヤマカガシであった。やはり車に轢かれたよう丸まった体はびくともしなかった。この日も急いでいた東彦は観察しないまま立ち去った。帰途確かめると、その死体は見当たらなかった。カラスが食べたのであろう。カラスにはごちそうであったに違いない。

三匹目はアオダイショウのようで、これはすばやく道を横断し藪に潜り込んだのでよく分からない。青黒い色から判断しただけである。

この雑木林は道路に沿って広がっている。ならずと縦が三百、横が七十メートルほどの狭い面積である。この広さにこの数種類の蛇が生存できるのかよく分からない。しかし、時折ネズミが一行になって道を横断している。皆まるまると太っていた。これらのネズミは人慣れしているのか、

から幾度も聞いた。そして、今まで水面を這う蛇を見たことも幾度もあった。しかし、雨の中を濡れながら縫うように進む蛇を見たのは初めてである。巣が水浸しにでもなったのであろうか、それとも敵にでも遭遇してしまったのだろうか。いずれにしても何かのつびきならぬ事態が発生したに違いない。それを思うと、東彦は彼を気の毒に思った。雨は相変わらず霰のように降って来ていた。皮の帽子に当たる雨音が高い。

目前の蛇の種別はなかなか判別がつかないことに東彦はイラついてきた。余程捕まえようかと思った。しかし、それは無理であった。自転車を止め、蛇のところを駆けつけたところには蛇は雑草の中へもぐりこんでいるのは明白であった。彼はせめて種類だけでも確かめたく思い、じっと見つめた。

「黒い」

東彦はつぶやき、頭部を凝視した。頭部はマムシのような三角形でもない。胴体は細長く、マムシのようなずんぐりとしたふくらみはない。模様もない。ただ、全身が黒いのだ。

「しつかり確かめず、悔いを残しているピンクヘビの二の舞はしたくない」

そう思いながら東彦は黒い蛇を凝視し続けた。

あるいは人を人とも思わないのか、東彦の姿を見ても特に急ごうともしない。多くの蛇の食性はネズミやカエルなどであるからこの雑木林の蛇も十分に食物連鎖の上位に立って生息していけるのかもしれない。人間には邪魔と思われる小さな雑木林だがどれだけの命をめぐみ育てているか分からない。命の尊さに人も蛇もアメンボも違いはない。それにしても東彦は無駄な殺生を随分してきたと今にして後悔し、申し訳なく思う。

蛇との出会い体験はこの林道ばかりではない。彼が校長をしていた時のことである。赴任した三校ごととくで蛇に遭遇したのである。一校目は商店街や住宅、工場が混在しているような場所にあった学校である。二校目は商店街と住宅ばかりの地域である。三校目も住宅街の中にある学校であった。どの蛇も痛めつけられたらしく尾や背中にも痛々しい傷痕があった。中には切られてしまったのか、尾っぽが半分しかない蛇もいた。これらの蛇は全て校庭や校舎裏で見つけたものである。全てうっそうと樹木が生い茂る公園に「もう人間にいじめられるなよ」と言いながら放した。

#### 4 クロヘビもしくはカラスヘビ

東彦は蛇が水を好むということは幼い頃より周りの人々

「模様がなく全身が黒一色の蛇などはいないはずだ」

と、思った瞬間、彼は「あつ」と思った。彼の頭に閃くものがあつたのだ。それは昔、東彦が捕まえようと悪戦苦闘した蛇、カラスヘビのことであった。

「あのカラスヘビと似ている」

そう思ったのである。

カラスヘビとは、腹部を除く皮膚全体が黒く変化したもので黒化型と言われる蛇である。黒化する蛇の種類にはアオダイショウ、ニホンマムシ、シマヘビがいる。しかし、黒化型蛇の大部分はシマヘビであるという。通常シマヘビは淡黄色の体色に四本の縦じま模様が入っている。それが真つ黒に変化している。この真逆がアルビノと言われる色素が生まれつき欠乏し、白くなったもので人間にもある。

東彦が大学二年生の頃であった。その当時、彼はまだカラスヘビのことを知らなかった。

近くの名取川にアユの「ころがし釣り」（東彦の生まれ故郷ではこれを「がらがけ」と言い、餌を付けず針で引っ掛ける釣り方のことである）に行った時の話である。小一時間も竿を振ってはころがし、ころがしては振っていた。しかし、一匹もかからず「帰ろう」と思いながら竿を仕舞い始めた。ふと、足元に目をやった。一メートルほど先を

蛇が這っているのだ。体長は六十センチほどであった。ずんぐりとした胴をゆつくりとくねらせている。東彦の背筋を恐怖心が走った。全身真つ黒な蛇はいかにも不気味でどろどろとしく、身がすくむ思いであった。正体不明で真つ黒、しかも強烈な恐怖心を与える蛇に東彦の腰は引けてしまった。が、初めて遭遇したこのクロヘビの正体を何とか突き止めたという欲求が東彦の心に猛然と湧いても来た。と同時に、このクロヘビに対する得体の知れない敵愾心も赤い炎のように燃え上がったのである。実はこのクロヘビこそがカラスヘビであった。東彦はこの名をこの出来事の後知った。

東彦の育った所は工場地帯と農村の重なりであった村落であった。小川も林も藪も身近であった。暖かくなると蛇の姿はあちこちに見られた。多くはヤマカガシで、時にシマヘビやアオダイショウを見ることもあった。東彦たちはヤマカガシをアカヤマと呼んでいた。体側に紅色の斑点があることからそう呼ばれるようになったのだろう。背面には黄色、黒い斑点があり、毒々しく見える。彼らはこのアカヤマの姿を見ると理由もなく攻撃をするのであった。時にはポケットに入れて女の子たちに自慢げに見せることさえあった。

東彦たちがなぜ蛇を直ぐに攻撃したり、時には殺したり捕まえてどうするのか、などという目算は東彦には全くなかった。ただやみくもに捕まえてやる、またはやつつけてやるということしか頭にはなかったのである。

東彦はそつと右足を一步進めた。進めた瞬間蛇は鎌首を持ち上げ、東彦の方に頭を向けた。向けた鎌首に目を凝らすとどうも三角形の形をしている。しかもずんぐりしていかにも毒蛇っぽい。「ぼい」どころか正真正銘の毒蛇ではないかと東彦は思った。東彦の心に再び恐怖心が湧いて来た。彼の歩はそこで釘付けになってしまった。もしかしたらマムシではないかと思ったのだ。しかし、以前目撃したマムシは暗褐色のまだら模様があった。目の前の蛇には模様がない。ただただ黒く、正体不明なのである。それだけに段々と恐怖が募ってきた。一度恐怖にとらわれると人はそれを払拭するのは容易ではない。もしマムシであれば毒を持っている。少しでも噛みつかれたら毒が全身に回り、最悪死んでしまう。ましてや周りには人の影さもなく、声さえも聞こえない。助けを求めても誰も救いなどには来てはくれないだろう。背筋に冷たいものが走る。冷や汗が流れているのだ。捕まえるなどという蛮勇は直ちに捨て、直ぐに離ればよいのだ。だれもいないのだ。「臆病者」などと言う者はいやしない。東彦が黙っていれば済むことである。東彦は恐る恐る歩を進めた。すると蛇は舌

するのは自身たちでも分かっているとは思わなかった。「ただ理由もなく」というのが一番近いかもしれない。この当時は、アカヤマは「毒蛇ではない」と言われていた。そんなこともあつてか素手で平気で掴んでいた。アカヤマほどではないがシマヘビも時折見かけた。面白いのは、アカヤマを食べたことはないが、このシマヘビとマムシは食べたことはあつた。どちらも身より骨が多い感じで、ポリポリと齧った。シマヘビは特に痢の強い子（長時間激しく泣いたりする子）に効用があるとされ、そんな子の親はシマヘビをあぶつて食べさせていた。マムシは食べるよりもマムシ酒や消毒用に充てるのが通常であつた。東彦も脛をガラス片で大きく切った時にこのマムシ焼酎で消毒をしてもらったことがあつた。完治するまでに十日ほどかかったが化膿しないで治つた。蛇が今よりははるかに生活の中に溶け込んでいたのである。こんなことがあつてかアカヤマは攻撃の対象、シマヘビは食用というような概念が子どもたちに刷り込まれていたのだろう。

そんな経験をしながらか成長して来た東彦にとつてはたかが「黒い」、というだけで怖気つくなどということは自らの沽券に関わることであつた。

「よし、捕まえてやれ」

という気持ちが生じたのも自然なことであつた。

をチョロチョロと揺らしながら逃げ出したのだ。「逃げ出した」という言葉が逆に東彦の勇気を引き出したのである。彼は無謀にも捕まえようと決意を行動に移したのである。そして、蛇を追つたのである。敏感にその空気を察したのである。蛇は逃げる速度を速めた。東彦も負けずに急いだ。そして蛇のシツポをつかもうと手を伸ばした。が、ちよつとの差で届かなかつた。地面を這う蛇は体をくねって進むくねらず列車のように真つ直ぐ進んだ方が合理的に見えるのだが、長い進化の過程で直進でなく蛇行して進むという方法に到達したのは何か合理的な理由があつたのだろう。とにかく想像したよりも、また見たよりも速いのである。東彦はためらいや中途半端な気持ちを捨てて掴み取ることに集中した。

黒ヘビは十分な餌を得ているようだ。肌（鱗）つやもよく栄養も満点のようである。さぞかし皮下脂肪もたっぷりと蓄えていることだろう、と東彦は想像した。もし、お互いが言葉で意思疎通ができたとしたら黒ヘビはなんと言うのだろうか。ふとそんな疑問が東彦の頭に浮かんだ。多分、「愚か者め」と叫んだかもしれない。あるいは「どうして人間は見境なくわれわれを攻撃してくるのだ。勘弁してくれよ」と、叫んだかもしれない。これらのことばに東彦は満足に返答できないに違いない。東彦の今の行為は

全く愚かしく、生命に対する尊敬など全くなく、愚劣なことは明々白々なからだ。

と思った途端、黒へビは石垣に到達し、その隙間にさっともぐりこんでしまった。東彦はしまったと思った。「もう捕まえるのは無理だ」と諦めかけた。しかし、最後の挑戦とばかりに足をばつと伸ばし、しつぽを踏みつけた。そしてそのまま体を折った。さらに踏みつけた先のところに手を伸ばし、ぎゅつとつかんだ。固い、しかし弾力のある身体であった。黒へビは構わず穴へともぐりこんでいった。それを阻止するように東彦は左手も伸ばすと、今度はがっしりと尾をつかんだ。尾が細くなりかけている部分である。つかんだ腕の力が十分に反映されない。東彦もじわりじわりとつかんだ手を上に移動させていった。そして腰を下ろし、膝を着くと思いつき引つ張り上げた。しかし、蛇はびくともしない。握った蛇の胴体の一点に蛇の力と東彦の腕の力が集中して引つ張り合っているのである。

穴にもぐりこんだ蛇を引つ張り出すのは難儀である、ということとは大人たちから聞いていた。その通りであった。蛇は鱗という鱗を全部逆立て、あたかもつかえ棒のようにするというのだ。さらに体を膨らませるといふ。しかも蛇の絞める力は尋常ではない。彼らの身体は筋肉の鎧をかぶっているようなものなのだ。鱗ばかりかその筋肉を全て

東彦の口から弱い、しかし安堵の音が漏れた。

自転車止め、水面を進む蛇を見ている東彦の身体に雨は容赦なく叩きつけた。

「東彦、何をやってるんだ」  
突然、また祖母の音が聞こえてきた。東彦はその声にはつとまった。名取川でカラスへビを追った時と同じであった。

この大雨の中、蛇がどんな種類なのか、はたまた黒化型かなどということはどうでもよいのではないか。愚かなことをやって体を壊してはならない。早く帰宅するんだ。

祖母はそう言っているのだろう。東彦の身体がブルンと震えた。

水面を進んでいた蛇は歩道に乗り上げ、藪へ入ろうとしていた。その瞬間であった。その黒へビは一度止まり、そして首をもたげ東彦の方へ向けたのである。それは偶然かあるいは東彦の幻想だったかもしれない。しかし、もたげた首の色は青黒く、体を包むうろこは細やかで滑らかであった。身は細身であった。黒へビは「私はアオダイショウよ」と東彦に伝えているようであった。確かに水から脱した黒へビの色は黒よりも濃い緑色であった。

前方へおり倒し抵抗しているのだろう。東彦は起き上がり、足を踏ん張り両手で再び引つ張った。蛇の身体は直線になり、震えている。蛇も必死なのだ。恐らく死にもの狂いだったろう。東彦も持つ手を緩めず、立ち上がった両足を踏ん張った。蛇の全身がギリギリと震えた。「もう少しだ」と東彦は力をさらに加えた。蛇の体が千切れそうに思えた。その時であった。「チェツ」という低い、しかし鋭い音が聞こえた。東彦は蛇が叫んでいる、と一瞬思った。その瞬間、我に返った。

「無益な殺生は止める」

という母方の祖母の音が聞こえたのである。祖母は信心深い人だった。小さなころ炉端でよく昔話や仏さんなどの話をしてくれた。

「ハルヒコやよーぐ聞げや。川原の石ころ、道ばたの草木、鳥や蛇にも命があるんだ。無駄な殺生をすれば必ずその報いがくるぞ」

この祖母の話が突然頭に浮かんできたのである。そしてハツとなって蛇を握った手を緩め、離れた。蛇はこの瞬間、さつと穴へもぐりこんでいった。東彦は茫然となってそこに立ち尽くした。時間にして二分ほどに違いない。しかし、東彦にはもつと長く感じられた。

「よかった」

## 5 帰宅

東彦は自宅に到着する否や急ぎ自転車をカーポートに入れた。カーポートの透明な屋根を叩く雨の音が響く。その音は東彦の心を尚も苛む。しかし他方で「やつと豪雨から逃れられた」と、ほつとの思いもした。そして前かごの中に入れておいたバッグを掴むと家の中に駆け込んだ。バッグはビニルの袋で二重に包んでおいたのでほとんど濡れていなかった。玄関ドアの締まる音を聞いて居間から東彦の妻が顔を出した。妻の顔を見た途端、東彦は全身の力が抜け、更に肩や手足の関節が緩んでいくような気持ちになつていくのを感じた。同時にその肩や手足の間接がブルブルと震え出した。突然の身体の変調に東彦は動揺した。その震えを何とか収めようと力を加えるのだがなかなか収まらなかった。大雨の中、よほど緊張して自転車を踏み続けて来たに違いなかった。

「あらっ、大変だったわね。ずぶ濡れね。雨の収まるのを待つて帰ってくればよかったのに」

妻は軽い調子でそう言うと、洗面所に行きバスタオルを二枚持ってきた。

妻の言葉に「そう思ったが途中から降られどうしようもなかった」と答えようとしたが言葉が口から出てこないのだ。「あわわ」という不明瞭な声を発するだけであった。

「あなた何をやっているの。身体が震えているんじゃないの。雨に打たれて筋肉が縮んでしまったのかも」

そう言う手持ってきたタオルの一枚で東彦の髪や肩、背中を、ごしごしとこすり始めた。陶芸で粘土の捏ねりを始終やっている東彦の妻の手の力は強い。しかも手加減なしにやたら力づくでこする。髪の毛が数本抜けるほどであった。東彦は「痛い」と叫びそうになった。しかし、かろうじて抑えた。手荒な妻の手の動き、東彦の堪えが功を奏したのか、東彦の震えは消ええるように収まった。

「これで少しは水気が取れたかも。とにかく早くシャワーを浴びて体を温めるといいわよ」

「分かった、ありがとう。助かったよ、そうする」

かろうじてそう答えた。妻の加減のない手荒な行為が東彦の硬直した身体を目覚めさせたのかもしれない。東彦は「うん、そうする」としおらしくもう一度言った。そして、着衣を脱ぎ始めた。綿の下着は濡れて肌に張り付いている。腕を通して脱ぐのも難渋した。靴もびしょ濡れであった。というより靴の中には水が溜まっているのである。東彦はまさかこれほど身体が水まみれになっているとは思わなかった。足元に水溜まりができていたのも当然だと思つた。

今朝、出がけに「雨に降られるかもしれない」と案じた

震えた。東彦は三和土に広がった濡れた衣服を急いで集め、丸めた。持ち上げるとしずくが落ちてくる。「どうせ濡れてしまった三和土だ、後で拭けばいいだろう」そう思うと、丸めた衣服を絞った。思いのほか水の量が多い。びちゃびちゃと音を立てて三和土を打った。その冷たい水がさらに寒気をもたらしたのでろう、東彦は続けさまに三回くしゃみをした。吹き抜けの天井にそのくしゃみの音が響いた。

「風邪をひいてしまう」

そう思いながら東彦は絞った服を両手で抱え、つま先立ちになつて風呂場に急いだ。廊下にぼたりぼたりと服から垂れたしずくが点々と続いた。東彦は洗面所のドアをがらりと開けると洗濯機の蓋を上げ、衣服を中に放り込んだ。

どざりという音がした。水分をたっぷりと吸い込んだ衣服、とくにジーンズは想像以上に重かつたのだ。最後にブリーフを洗濯機に入れた。水を含みいかにもだらしく見えた。スイッチをいれた。すると「お洗濯ご苦労様です。一生懸命洗いますから」といういつもの音声が届いてきた。耳慣れた声である。「こしやくな」と思うことがあつたが、今の東彦には洗濯機が冗句で東彦の心を慰めているように思えた。洗面の東彦の表情が緩み、微かに笑みが浮かんだ。東彦はようやく落ち着きを取り戻したようであつた。

東彦はお風呂場に入るとガスのスイッチを入れた。赤い

東彦は、敢えてランニングシューズを履いて出た。この靴は布製である。洗えば元の通りに戻るだろう。これが革靴であれば後の手入れが厄介である。「正解であつた」と、東彦は思った。そう思いながら靴下を脱ごうとした。しかし、濡れた靴下は皮膚に張り付き、脱ぐのが容易ではないのである。片足を上げている不安定な状態のままに強引に脱ごうと力を加えると、身体が崩れ落ち尻もちをついてしまった。両手も同時に着いたものだからお尻への衝撃は軽く済んだ。しかし、痛みが走った。着いた右手の肘の部分である。東彦は思わず「ずーん」と唸ってしまった。自転車ごと転倒した時の傷に追い打ちがかつたのである。

「やはり骨か筋を痛めているのか」

東彦は暗い気持ちに襲われ、またもや体中の力が抜けていくような気持になつた。

「大ごとにならなければよいが、念のためだ、明日外科のクリニックに行こう」

と、独り言ちた。そして再びのろろと靴下を脱ぎ始めた。また転んではいけないと、今度は上がりかまちに腰を下ろした。

下着一枚の裸体に床の冷たさが直接伝わって来た。身体から体温が急速に奪われていった。東彦の身体がぶるつと明かりが付き、続いて「ポツ」という低い音がした。蛇口を捻ると水が勢いよく出、その水が床のタイルに当たり、シャワーの先が蛇のようにならうち回った。そして勢いついた水が四方八方に飛び散った。栓をいきなり全開にしたものだから水の勢いが強すぎてシャワーが止め口から外れたのだ。その瞬間「ひゃつこい」と東彦は大声を上げた。冷えた東彦の身体に冷水はあまりにも刺激が強すぎた。東彦は慌てて水道の蛇口を閉めた。身体の芯に刺さるような水が止まるのにほんの数秒かかっただけだった。しかしながら東彦には長く感じられた。しかも、身体の芯に刺さつた冷水は鋭い痛みを残した。たかが水道水である。それなのにこんな打撃を身体に残す。しかもわずか数秒の間のことである。

その時である。風呂場の窓ガラスに雨が当たる音がした。雨はまだ止まず、依然として空を暗くするような大雨が続いていたのである。しかも、窓ガラスを打つ風さえもただごとではない。時折窓がびしびしと悲鳴を上げる。

「鬼雨」だ。東彦は再びその言葉が脳裏に浮かんだ。そして、肌を突き刺すような雨、自転車と共に転倒したこと、川と化した道路などと帰宅途中に起きたことが次々に思い出された。無事に帰宅できたのが奇跡のようにさえ思った。天候の変事は今もそしてこれからも続くのである。しか

も、東彦はこの天候の変調を全身で感じ取ったのだ。こんな経験は後にも先にもこの日が初めてであった。「鬼」という言葉が脳裏に浮かんだのは単なる偶然ではなく、自然界が何か重大な警告を発しているのではないのかとさえ思った。

すると、「カラスヘビ」の姿がはつきりと眼前に浮かびあがって来た。それは紛れもなく黒化したアオダイショウであった。途端、東彦の全身の毛穴から彼の精力、気力が噴き出し、空中に散った。すると東彦は空気が一瞬に抜けた風船のようになよなよと床に倒れこんでしまった。それはまるで脱ぎ捨てられたダイビングスーツのようであった。

しかも、持ち手を失ったシャワーはまるで断末魔を迎えた蛇が七転八倒しているようでもあった。

「あなたあー」

という妻の呼ぶ声が切れ切れに東彦の耳に届いた。しかし、東彦はそれに応えることはできなかった。力が少しも湧いてこないのだ。「絶望」という文字が東彦の脳裏をよぎった。

「しかたがない」

東彦はかろうじてそうつぶやいた。しかし一方で「なにくそ」という負けん気がムクムクと頭をもたげて来た。東

彦は跳ねるシャワーの先を掴まえると、ぎゅっと握った。そして、ペタンとタイルの床にお尻をつけたまま胸に向けてシャワーを浴びせた。熱いくつもの細い線の束が胸に鋭く刺さってきた。

「なにくそ、負けるもんか」

東彦は自身に言い聞かせるように力を込めて言った。

「どうしたのおー」

間延びした妻の声が、今度は、はつきりと聞こえた。

「ベ・つ・に・い・い・い・い」

東彦は一語一語はつきりと、そしてゆっくりと応えた。外はなおも車軸を流すほどの雨が続いていた。

終わり